

## 娘からのメール

中央区・清滝支部 小田原良治  
(小田原病院)

次女に娘がいる。「綾華」という。私の孫ということになる。今、5歳、チコちゃんと同じ年である。公文をはじめたらしい。夜10時半ごろ、娘から写真を添付したメールが届いた。「公文をしている綾華」とある。こんなに遅くまで感心なことだ。こんな会話がつづく。娘(ゆか)「ガンバレー」、孫(綾華)「うん。わかったから心の中で応援してくれる? 声に出すと、私集中できないから」、娘(ゆか)「・・・すみません」。思わず笑ってしまった。

爺馬鹿、すぐに返事を返した。「その通り、心のなかで応援しましょう!」、「おじいちゃんも鹿児島で応援してるよ~」。

娘から返事が返ってきた。「綾華が、『おばあちゃんは応援してない?』と聞いています」と。これはまずい。即、返信した。「おばあちゃんも応援しますよ」。娘(ゆか)「安心したそうです」。よかったです。

妻が洗濯機を回して、居間に帰ってきた。メールを見て、妻もあわててメールを送った。「あやかちゃん、おばあちゃんも、いつも応援しているよ~」。返信はなかった。寝てしまつたらしい。11時だ、さすがに寝ちまつたか。

次女は東大病院の糖尿病内科にいる。夫が数理モデルの研究とかで北海道大学に行っているため、現在、親娘の二人暮らしだ。私は、婿の留守に目を付けて、上京すると孫に会いに行くのを楽しみにしている。

今、次女・息子・甥姪の5人が東大病院にいる。姉弟、従兄弟、お互いに専門を活かして患者さんのコンサルを行っているようである。皆がなかよく協力しているのはうれしい。

先日、息子にふるさと納税の返礼品で肉が沢山送ってきたらしい。息子の冷凍庫は肉で満杯である。息子は消化器内科にいるが、独身に加えて、いつも帰りが遅い。冷凍肉の処理に困っていた。娘が声をかけた。「私が料理食べさせてあげるから、その肉、持っておいで」なかなかWinWinの提案である。果たして、提案に乗ったのであろうか?同じ東大病院において、家も近くというのになかなか便利なものである。もっとも、婿が単身で北海道に行っているおかげではあるが。

親元を離れて、働きながら、一人での子育ては大変であろう。上京するたびに食事に誘っているが孫が飛んでくるのはうれしいものである。娘はもちろん喜んでいる。「財布がきた」と思っているのであろう。娘は、学位も終わり、専門医も取った。東大の糖尿病内科はやさしい医局で子育て中の女医さんは優遇されているらしい。自由度が高いと喜んでいる。自由な場所がいいなどというのは親にそっくりである。今、娘に助教の打診が来ているらしい。「今の生活がいい」と、逃げ回っているが、どうもそろそろ危なくなってきたと言っている。助教から逃れて、鹿児島に帰つて来ればいいと思っているのだが、なかなか帰ろうとは言わない。私は、鹿児島で、孫に「がんばれ~」と声援を送りしながら、息子と娘に、心の中で叫んでいる。「帰えって~こ~いよ~」。